

箱庭療法におけるクライアントとセラピストの対話の意味

- 非臨床群による作品制作後の言語的やりとりの分析 -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
大寄 卓也

箱庭療法は、作品を制作すること自体に治療的意味があるとされるが、作品制作後の対話にも重要な意味があると考えられる。本研究では、箱庭作品の特徴や解釈ではなく、今まで明らかにされていない作品制作後の対話に焦点を当て、その内容や過程を分析し、対話そのものが持つ意味を明らかにすることを目的とした。調査は、大学生（以下、制作者）6名が箱庭を制作し、臨床心理士（以下、CP）3名がセラピスト役を担い、通常箱庭療法と同様に行われた。1人のCPが2人の制作者を担当し、その様子を録音した。この音声記録から作品制作後の対話の逐後記録を作成し、CPと制作者ごとの発言を意味内容ごとに分類した上で分析を行った。その結果、CPの作品に関する質問に対して、制作者が説明をする形で対話が推移することが多かった。しかし、作品の玩具や制作過程の様子など、対話の中で何に焦点が当てられるかによって、その内容はケースごとに異なっていた。さらに、6ケース中、3ケースの対話において重要な気づきが生じていることがわかった。この3つの対話を詳細に分析した結果、気づきの種類や、それが生じるまでの経過は同一ではなく、対話において何に焦点が当てられるかにより様々であることが確認できた。実際の作品制作後の対話を明らかにできたことは、箱庭療法研究にとって有意義であり、経験の浅いセラピストが箱庭療法を実践する上でも有用であるといえる。